



たんぽぽ



幌別小学校ことばの教室

令和5年8月28日 No.5

8月も終わりを迎えると、朝夕と涼しくなり過ごしやすくなってきましたね。子どもたちは夏休み中も、真っ黒に日焼けをして夏を満喫したようです。日差しを浴びるのも、夏にしかできない経験でしたね。まだまだ残暑はまだきびしいです。体調管理をしながら、2学期をむかえましょうね。

保護者面談について（小学部）

- ・個人懇談の時間を設けていただきありがとうございます。2学期の指導に生かしていきたいと思っております。今後も、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

行事予定 9月

- 14日（木）教育相談日
- 18日（月）祝日：敬老の日
- 28日（木）教育相談



お礼

遊具の寄贈がありました。大切に使用させていただきます。ありがとうございました。



「知っていますか？」

どもりと向き合う一問一答

著者：国際吃音者連盟 顧問理事 伊藤慎二

*どもっているような話し方をしても、本人にその自覚がなく、悩んでいなければどもりといえません。反対に表面的にはどもっているとは思えない人が、自覚して悩んでいれば、それはどもりです。

*母親が吃音の原因とはいえません。世界の吃音研究でも原因は解明されておらず、親の態度や引っ越しなどの事情が必ずしも吃音に直結しません。

*なぜそうなるのか、どもりの本質はほとんどわかっていません。

*いろいろな仮説が立てられて、調査、研究がなされました。れこれだと思ふ原因が提案されると、ほかの人が調べ直して否定する、そんな繰り返いで、原因の仮説はほとんど消えました。

*話し手は聞き手の影響を受け、特に吃音はそれが大きいことから、周りがよい聞き手になるのは必要です。

*困難があっても、現実的には対処できる知恵や工夫を子どもが身につけるためには、子どもが自分で支えきれないほどのマイナスの意識を子どもの時にもたせないようにしたいものです。

*「どもりは悪いもの、劣ったもの、恥ずかしいもの」という烙印(らくいん)と、「吃ってはいけない、どもりは治さねばならない」という呪縛(じゅばく)によってますます悩みが深まるのです。

*社会一般の「どもりは治る」という誤解も吃る人を苦しませます。

*「じぶんが嫌い」と思う子が最近目立って多くなりました。「自分が好きだ」と言える子どもに育てることはすべての子どもにとっても必要です。

*問題なのは、「吃っている私はだめな人間だ。愛されない人間だ」と自分を否定し、自分が嫌いになり、他者を信頼できないことです。子どもがどう生きるのかのライフラインを形成するのは、十歳前後の学童期ですが、その基礎をつくるのが、幼児期です。その時期に、子どもをしっかり愛してください。 ※本文の一部抜粋にて

教室研修より

ことばの教室では、教室研修を行っています。7月は「吃音(きつおん)」についての研修をしました。著者の伊藤先生自身が吃音者であり、小学生の頃から吃音に悩まれていたとのこと。とても読みやすく、吃音理解に少し近づくことができた1冊でした。

田口恒夫さんは、医学博士であり言語治療の専門家でした。言語治療を学校教育（ことばの教室）に取り入れられた方であり、北海道の研修会には何度も来道されていました。今月は、その田口恒夫さん語録を紹介させていただきます。

何度聞いても胸に刺さります。（須藤）

子どもが、嬉しそうにしていない時は、自分のやり方が間違っているのではないか、子どもに合っていないのではないか、と反省してみる事が大切である。

人は自分に簡単にできて、他人にできない事をみると、むり強いする傾向がある。

言語臨床家には忍耐は無用である。強い忍耐力などを持っていつまでも間違ったことを忍耐強く続けられては、子どもはたまらない。ちょっとでも「変だ」と思ったら、忍耐などせずすぐ止めて自分の考えややっていることを考え直すことである。

言語治療における成功の最初の兆候としては、おしゃべりになること、喜んで通ってくること、先生が喜ぶのを喜ぶようになることであろう。

長い間、子どもの頭の上に石を置いていて「石をのけたら子どもが伸びてきた」といって喜ぶようなことをしていることがある。

田口恒夫プロフィール

- ・北海道大学医学部卒
- ・東京大学医学部助手
- ・整肢療護園医員
- ・国立聴力言語障害センター言語課長
- ・お茶の水女子大学家政学部児童学科教授、名誉教授
- ・医学博士
- ・NHK ことばの治療教室担当

- ・瑞宝賞受賞
- ・従四位受勲

ことばの障害は、単にスピーチの問題ではなく、それはまさしく「人間そのもの」の問題であって、「障害そのもの」ではない。なぜならば、言語障害の問題は人間の間人たるBehavior（行動、態度、振る舞い、挙動、行為、動作、習慣、反応、作用）の問題であって、体の問題ではない。したがって、言語治療とは「人間対人間の関係を育てる」ことである。